

特集：新型マツダアクセラ

9

新型マツダアクセラのデザイン Design of All-New Mazda Axela

栗栖 邦彦*1
Kunihiko Kurisu

要 約

新型アクセラは、初代の成功を踏まえ、再びカスタマーの期待を超えることを目標とした。そのためには、デザインをどこまで進化させるかが、大きな課題であった。この課題を解決するために、主要市場にて調査を行い、カスタマーがコンパクトカー（以下Cカー）に求める重要な要素を明確にしていった。その検証結果と各拠点のデザインチームの協働により生まれたのが、“ニューファミリーフェイス”と、“エクスプレッシブ”（表情の豊かさ）を共通テーマとしたデザイン展開である。Cカーセグメントの競合は、強い存在感を表現するダイナミックな方向を模索している。その動きの中で、新型アクセラは“Zoom-Zoom”を明確に表し、トップクラスとなることを目指した。

Summary

We aimed at exceeding customers' expectations once again with the new Mazda 3 given the fact that the outgoing model has been successful. The key was to what extent the design should be evolved. In order to find it out, we conducted researches in markets and clarified what customers really need in compact vehicles (hereafter called C cars segment). Combining the clinic result with outputs from designers in branches, we decided to develop expressive designs (rich countenance) with incorporation of the family face. Vehicles in the C cars segment have been running toward dynamic directions to enhance strong presences. Under the circumstance, we targeted at expressing “ Zoom-Zoom ” clearly to take the No.1 position.

1. はじめに

初代アクセラは、従来のCカーセグメントの概念にとられない車としてデビューし、世界の市場で大いに受け入れられた。マツダのラインナップの中での販売台数は、今や1/3をしめるまでに成長し、重要な戦略車種となっている。Cカーセグメントは世界中で一番生産台数が多く、環境問題からくるダウンサイジング等により、今まで以上に拡大傾向にある。新型アクセラはデミオ、アテンザに続く新世代商品群の第3弾にあたる。初代アクセラの良さを引き継ぎ、新世代商品の統一性を持たせながら“マツダらしさ”をより強めることを意図した。カスタマーに強い情感をもって受け入れられるデザインでありながら、その形状には、機能的な意味を含ませた。

2. デザインコンセプト

2.1 デザイン基本方針

新型アクセラは初代が目指した“エキサイティング&コンフォータブル”の考え方を踏襲し、より大胆に、力強くスポーティさを増すことを目標とした。カスタマーニーズの高い品質については、優先順位をつけ、触感に至るまでの徹底した品質のコントロールを行った。新型アクセラに与えられたミッションは、

- ① グローバルで再び、カスタマーの期待を超えるデザインを完成させる。
- ② デミオ、アテンザに続く“Zoom-Zoom”を明確に引き継ぎ、一貫性を持たせることでブランド強化を行う。
- ③ Cカーセグメント内でトップクラスの品質を実現する。

*1 デザイン戦略スタジオ
Design Strategic Studio

2.2 デザインコンセプト

デザインコンセプトは“エクスペッシブ”を統一コンセプトとした。マツダデザインは現在、2001年からのテーマである“アスレチック”から“Nagare”へ移行期にあたる。自然界のもつ物質の動きからインスピレーションを受け、造形に表情豊かな強い個性を与えることを目的としている。新型アクセラは、デミオ、アテンザと続く一貫性をもたせながら、面やライン、そして塊に表情の豊かさを表現することで、マツダらしい存在感を出すことを意図した。実現のための造形キーワードは“テンション（緊張）& トランジション（変遷）”である。全てのラインは方向性を持たせ、カーブの強さと伸びのあるラインでコントラストをつけ、面は変化していき他の面と自然に溶け込んでいく。この形状は、効率的なエクステリアの風の流れや、心地よいインテリア空間を生む。個性の強い欧州車や、塊感の強い北米市場のデザインに対抗する、大胆さや力強いスポーティさを追求した。これらの表現により、カスタマーのアクセラに対する期待を、再び越えることを狙った。

3. エクステリアデザイン

3.1 エクステリアデザインテーマ

初代からの進化度をどうするかが、デザインテーマを決める上で大きな課題であった。解決のため、革新型テーマから進化型テーマまでの幅広い検証を行った。革新型テーマは、初代アクセラから離れ、自由な発想でダイナミック、エクスペッシブを素直に表現した案。進化型テーマは初代の良さを残し、先進的にした案とした（Fig.1）。これらを基に、ターゲットカスタマーを対象にしたクリニックで

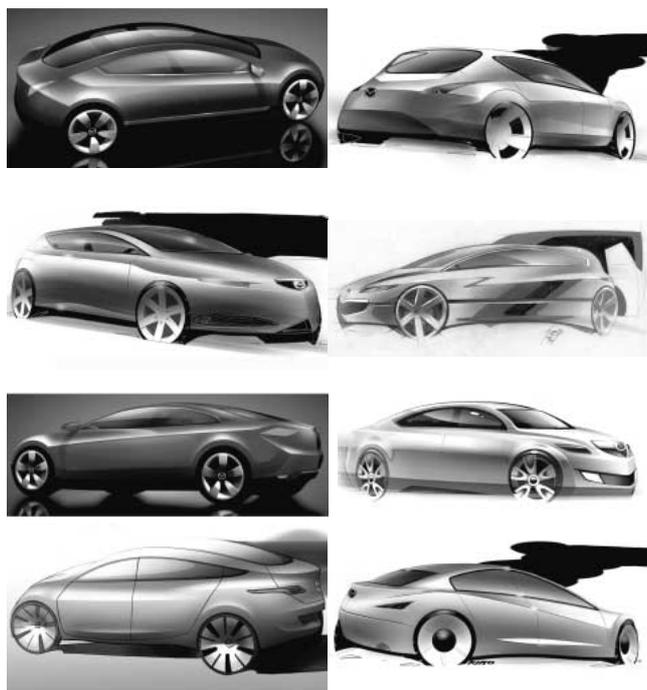


Fig.1 Idea Sketches

の検証結果は、

- ① 5ドアハッチバック（以下5ドア）は機能性とアスレチックが高次元で両立すること、力強いフロントビュー、コンパクトに見えるキャビンが必要。
- ② 4ドアセダン（以下セダン）はスポーティかつ洗練されたハイエンドな存在感が必須であること。

スタイリングを重んじて、これらの要素が弱まると、カスタマーの期待値に反することが判った。5ドアはボールド（大胆さ）、セダンはソフィスティケートド（洗練された）をキーワードとし、上記内容を盛り込んだテーマを追求した。

3.2 プロポーションスタディ

カスタマーニーズとして、キャビンはコンパクトに見せながら、機能性も満足させる必要があった。プロポーション決定には重要な、Aピラーの前後位置について検証を行った。Aピラーを前に出しすぎると、インテリアから斜め前方を見た時に、Aピラーによる死角ができ、安心感が失われると同時に、エクステリアから見てもキャビンが大きく見え、きびきび感がなくなってしまう（Fig.2）

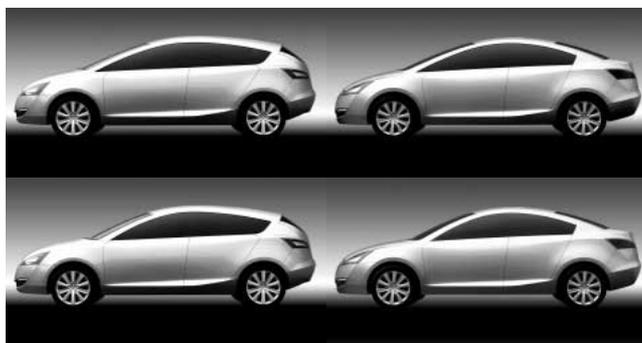


Fig.2 Proportion Study

3.3 強い進化の表現

(1) 初代モデルからの継承点

初代アクセラはグローバルカーとなり、ファミリアから大きな革新を行った。新型アクセラのデザインテーマは、ブランドの定着を狙い、再び大きな革新を行わず“強い進化”とした。5ドアは、台形のCピラーとリヤフェンダの張り出しによる踏ん張り感のあるたたずまいの良さ、セダンはショート&ハイデッキによるタイトなプロポーションが、カスタマーの好評点であり、初代アクセラの強い個性となっている。これらの要素は、50M以上離れた位置からでも認識でき、テーマとして継承した（Fig.3）



Fig.3 1st Axela

(2) ニューファミリーフェイス

欧州の競合は、強いファミリーフェイスで、ブランドをイメージ付けている。クリニック結果からも、強いフロントが求められた。キーイメージとなったのは、マツダのショーカーの“流雅”である。ポリュームの動きの中に、5ポイントグリルを強調したフェイスは、明確にマツダを表している (Fig.4)

新型アクセラは、上部開口をなくし、下部開口部を5ポイントグリルとして、一つに統合した。重心を低く、ワイ



Fig.4 Ryuga



Fig.5 Center Focus

ドに見せ、ダイナミックでスポーティな印象を与えることを意図した。

(3) センターフォーカスの追求

5ポイントグリルは単にグラフィック要素ではなく、センターに力を集めること (センターフォーカス) を目的としている。ラインとポリュームの動きを、ボデー全体でセンターフォーカスにすることで、色々な角度から見た時でも、ダイナミックで力強さを与えることを意図した。

センターフォーカスの考え方はリヤ周りにも展開した。リヤ平面でのラウンドを強め、すべてのポリュームの動きをセンターに集め、ダイナミックさを出した。トランク周りは塊の強さを表現するため、ライセンスプレートをパンパに配した (Fig.5)

3.4 2種類のボデーデザイン

デミオ、アテンザからの一貫性を持たせるため、力強いフロントフェンダからウエッジさせたキャラクタラインに繋がるテーマを採用したが、5ドアとセダンのキャラクタの違いを表現するため、フロントフェンダから後ろはユニークなデザインとした。5ドアは下回りのラインをCピラーに向かわせることで、コンパクトに見せている。サイドシル上部のハイライトは後部でボデーサイド面に同化していき、リヤフェンダを強調することで、大胆さと力強さを出した。セダンのプロポーションは、ショートアンドハイデッキとし、塊の強さを表現した。ショルダーの面は、後ろに向かうほど緩やかに変化し、キャラクタラインに光と影のコントラストを与えている。ドアの下周りは、リヤバンパに繋がる伸びやかなラインとし、セダンに必要な洗練されたイメージを出した。こうした造形手法により、置かれる環境に応じて、光と影を微妙に変化させていき、面の表情が更に増すことを狙った (Fig.6)



Fig.6 Side Design

3.5 エクスペッシブなディテールデザイン

スポーティグレードの17インチアルミホイールは、外側に向かって、面を捻ることで、躍動感と興行きを出し、大きく見せている。ランプはセンターフォーカスをより強調

する表情豊かなグラフィック構成とし、メッキを効果的に扱うことで、1クラス上の品質感を実現した。カスタマーの関心が高いこれらの部位を、徹底的に創りこむことで、“エクスペッシブ”をより際立たせた (Fig.7)



Fig.7 Expressive of Details

3.6 スポーツバージョン エクステリア

フラッグシップモデルとして、マツダスピードバージョンを5ドアのみ設定した。初代アクセラと同様にボンネット、フロントフェンダ、バンパ、リヤスポイラ、ホイールを専用部品とした。初代はあえて大幅な代わり映えを出さない戦略であったが、Cカーセグメントでは、よりダイナミックなスポーティモデルが登場してきている背景から、ノーマルモデルからの差別化レベルを拡大した。新型アクセラはインタークーラー開口をボンネット上部に配し、ラインの抑揚を強調することにより、大幅な変わり映えを出すことを意図した。5ポイントグリルは光沢のあるダークメタリックを塗装することで、ポデーとの一体感を強め、ハイエンド感を表現した。リヤ周りは大型のフローティングタイプのスポイラを設定することで、フロント周りのボリューム感に対応している (Fig.8)

4. インテリアデザイン

4.1 基本パッケージレイアウト

新型アクセラは、ヒューマンマシーンインターフェースを基に、ゾーンレイアウトコンセプトをインテリアの基本思想とした。この考え方は、表示類は見る頻度によって、適正な位置、すなわち、視線移動の少ない位置に配置することを意図し、シフトやオーディオなどの操作する部位は、腕の動きに沿った適正位置に配置することで、安心して、スポーティな走りを楽しめることを、目標とした。



Fig.8 Mazda Speed Exterior

4.2 インテリアデザインテーマ

ゾーンレイアウトコンセプトの考え方を基に、インストルメントパネル (以下インパネ) は、視覚的にも、ドライバを包み込むように構成し、適度なタイト感を狙った。インパネは、傾斜させ、緩やかに変化していく面構成により、視覚的に前方の圧迫感をなくし、センター部から左右に広がる加飾パネルによって、広がり感のある空間を実現した。

シルバー加飾は低い位置にレイアウトすることで、重心を下げスポーティに見せている (Fig.9)

インパネからリアコンソールにつながるラインは、カーブでつながっている。テンションを持たせたカーブで構成させることで、スタイリッシュなインテリアを実現した。リアコンソールのカーブは、シフトを前側に倒したときのヒーターコントロールノブとの干渉を防ぐ役目も果たしている (Fig.10)



Fig.9 Interior Design Theme

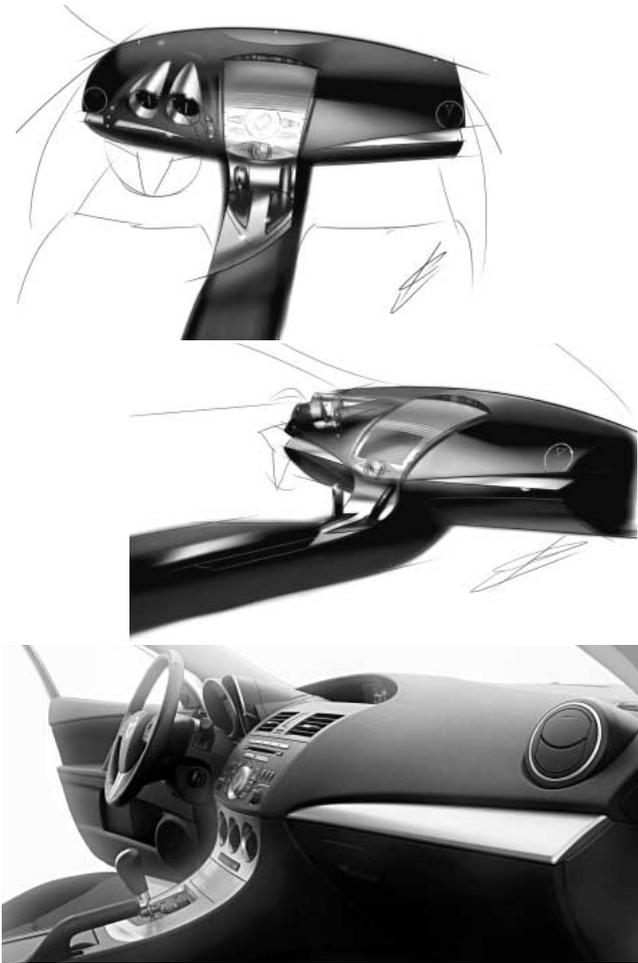


Fig.10 Interior Layout

4.3 品質の表現

欧州市場でのクオリティに対する期待値は、非常に高い。品質を保つための必須要件として4つ定めた。

- ① インパネ上面は柔らかい素材を使う。
- ② 分割ラインは極力、減らす。
- ③ 低い艶で統一する。
- ④ 表面の絞は部位によって使い分ける。

その中で、インパネ上面は一体で成型し、ソフト素材とした。インパネとリヤコンソールの分割ラインは、オーディオ下部までコンソールを延長し、インパネ、コンソール、グローブボックスのシンプルな構成とし、分割ラインを極力減らす配慮を行った (Fig.11)。



Fig.11 Parting Line

4.4 スポーティ表現

メータは筒型とし、奥に赤色の文字とブルーの間接照明を配した。ブルーの間接照明は赤色の文字を際立たせる効果があり、指針は白色としコントラストをつけ、見やすさを配慮した。メータ上部は、反射防止のフードをなくすることで、インパネ上面に軽快さを与えている。

トリムにはグリップタイプのハンドルを左右対称に設定した。ドア開閉時にしっかりとホールドでき、助手席側では、コーナリング時にも、安心して体を固定できる。ドアグリップ形状は手をトリムに置いただけで、自然に握れる形状とし、パワーウィンドウの操作性改善のために、表面を斜め形状とした。夜間には、間接照明にて、スイッチを照らす配慮も行った。

シートは、乗降性とホールド性を両立させたバケットタイプとし、カーブで構成させることにより、インテリア空間に緊張感とリズムカルな心地よさを与えた (Fig.12)。



Fig.12 Sporty Item

5. カラー & マテリアル

5.1 エクステリアカラー

ボデーカラーはグローバルで全11色とした。5ドアのテーマカラーはセレスティアルブルー。色の鮮やかさを高め、大胆さを表現した。セダンのテーマカラーはアルミナムシルバー。アルミの含有量を増し、平滑さと輝度を増すことにより、形状がはっきり見え、洗練されたイメージを表現した。マツダスピードバージョンは、ベロシティレッド。鮮やかさの中に、プレミアムフィールの輝きを醸し出した (Fig.13)。



Fig.13 Body Color Line Up

5.2 インテリアカラー

インテリアカラーは全3色設定した。スタンダードなブラック，モダンさを狙った欧州向けのグレー，高品位を狙った北米向けのデューンページュである。デューンページュは，大自然が持つ力強さを表現するため，彩度を上げ，赤黄よりの色域とした。黒とのハイコントラストのコーディネートとすることで，スポーティに見えるページュとした (Fig.14)。



Fig.14 Interior Color

5.3 スポーツバージョン インテリア

マツダスピードバージョンのインテリアコーディネートは，ドアを開けた瞬間，インパクトを与えることを意図し，赤のグラデーションをテーマとした。黒の中に赤のグラデーションを有機的に入れることで，エクスペリシブを最大限表現し，マツダスピードバージョンの独自性を強く表すことを狙った (Fig.15)。



Fig.15 Mazda Speed Interior

6. おわりに

新型アクセラのデザイン開発は，正に地道な積み重ねで，検証と造りこみを繰り返し，トップレベルのデザインを実現することができたと思っている。このことは，デザイナー，モデラー，設計者が根気強く，一つ一つの課題を乗り越えた結果であり，継続が力につながった一例である。

カスタマーのマツダに対する期待の一つはデザインであり，カスタマーの期待を超えるデザインを常に造り続けることが，カスタマーとの深いつながりを維持，継続させられる唯一の道である。今後も，新しいテーマ創造に向けて，邁進する必要がある。新型アクセラのデザイン開発は，将来的なデザイン開発の一つの基盤を構築できたと思うし，自信にもつながったと確信している。

著者



栗栖邦彦